2000. 4. 24

フルート～ ドビュッシー「シリンクス」

フルートの音色には、様々な色がある。

フルートの音色は、一般的には、透明で澄んだ高音の響きと思われているが、低音部は、どもるような、くぐもった音を出す。

高音は、空に向かって飛び去るような、そして、飛び去ってゆくにつれて、次第に薄められ、しまいには、空の色に溶け入ってしまうかのような響きがある。

例えて言えば、森の中に射し込む陽射しだ。深い森の中に分け入ると、陽射しがまっすぐな一本のリボンのように差し込んでいる場所に行き当たる。いや、差し込んでいるようには見えず、むしろ、地面から、森の外へと、光が天に向かって射しているように見える。そのリボンの中を、細かい塵が、文字通り「舞い上がって」行く…。
それは、うす青く透明な色だ。

低音は、うす暗い深い森の中を分け入ってゆくような、そして、分け入ってゆくときに草や木の梢が立てる時の、さらさらという音のような、そして、現れたかと思うと、突然ふっと消えてしまう、そんな響きがある。

例えて言えば、森の中で、高い木々のこずえが重なり合う、森の天井を見上げたときに、木々が揺れるにつれて、きらりきらりと光る、瞬きのような陽光だ。現れては消え、また現れては消える――― しかも、一瞬のうちに…。
それは、緑色を帯びた影の色だ。

ロンゴス作の「ダフニスとクローエ」という物語がある。ラヴェルの同名の管弦楽曲・バレエ曲としても有名だ。実に単純な牧歌的物語なのだが、非常に美しい。これを読んだゲーテは、絶賛を隠さなかったという。

この物語の中にも、シリンクスの由来が物語られている。それによれば、シリンクスという若い娘が、牧神パーンに追いかけられたため、沼の葦に姿を変えてしまい、悔やんだパーンが、その葦の茎を蝋付けして、この楽器を創り出した、という…。

ドビュッシーの作になるこの曲は、そのような古代的で素朴な響きを持っており、しかも、フルートの持つ高音部の澄んだ音色と、くぐもるような、呟くような低音部の音色を、

微妙に旋律に織り込んでいる。それは、シリンクスとパーンの、それぞれの思いのようにも、また、両者の想いの織り成す物語そのもののようにも聞こえる。